

清水谷殿か、又は押出し合点なく候とも、飛鳥井殿などへ  
得御意候事、成申間敷事にや。其邊にて御様子少々御聞合  
被仰聞可被下候。頼入申候。

(朱書) 此一事中納言殿へ相尋候處、日野殿のやうなるは有御聞敷候。有折川殿は事お  
もく候。清水谷殿は謀家へ相談総元たるべく候。近衛殿古今御傳受候へども、  
公家にては宗廟の外無き御候。中納言殿なども、有折川殿近衛殿へ御相談  
候。外に武若小路殿若菜に候へども、近頃の粉骨にて候へども、若菜邊處に  
て候。竹内殿よほどよく、是は公家中も相談被申候よし御申候。遺棄へ申候  
へば、成程々々竹内殿心安候間、御みせ可被成もの可被遣候。是は日野  
殿のやうに思召候は、案に違可申候。有折川殿清水谷殿も古今傳受にては  
無之故、相怒も有之に付て、中納言殿は近衛殿へ御うちかひ候旨御申候。

一、竹田忠張の梅花を贈れるに

十二日。忠張の許より竹隠に就て、梅花などたうべけるま  
し。

あらしふく冬の心もいつしかにわすれてめづる梅の初花  
又謝し遣すとて竹隠迄。

病床のなぐさめにとて、さる人の梅の花たうべけるを、色  
香にもたぐへてふかき御心のほど、わすれがたくてひとり  
ごちし侍りける。

冬ごもる關の戸ながら梅がかのふかきや君が心なるらん  
梅の花色をも香をも知る人のふかき心にいつならひけん  
一、雪に對して

十六日。對雪詠。

故郷の夢を残して起きいづる草のいほりの今朝のはつ雪  
降初る今朝だに松のしたいほに風もおとせぬ庭のしら菊  
山里をおもひわすれて待人もよもぎか本の今朝のしら雪  
人とはぬ跡さへしるく淋しさの昨日にまさる今朝の初雪  
むらさきの初もとゆひや武藏野に行末遠く降れる白ゆき  
昨日見し富士の高ねの白雪を嵐やさそふむさし野のはら  
今朝白鷗軒のもとより消息。

珍しく降初し雪のうち、老身は爐火を友として、世の心あ  
る方の詠を思ひやり罷在候。御學窓嵐もいとほで、御詠に  
いとく御すき事の御言葉もと存じ、つゞりまゐらせ候。

問ばいかにいとほでやある庭の面さぞな詠の今朝の初雪  
返すく明日からは入寒、けふの雪氣御氣色のほどいぶか  
しく、けさ起出しより存捧二封候。恐怖。

此返しとともに書加へてつかはず。

とふ人のことばの花も初雪もそでにめかれぬ今朝の詠か  
一、雪月のうた

十六日。雪月殊に清光。

武藏野や草はみながら埋もれて雪こそ月の宿りなりけり  
雪の歌忠張へ遣候へば、左の通り返歌并發句落手。

ことの葉に添て心はかよへども跡だに見えぬ庭の白ゆき  
見てぞ思ふさぞ故郷の今朝の雪

一、元辰が紅葉の句

過日元辰へ消息の序に、高雄の一葉相送候處、如左落手。  
敷跡の名さへ高雄の紅葉かな

一、室直清對雪の詩その他

直清へ雪の詠所望、則一律。其題對雪云。

清且黃雲合。初看素雪飄。散花多間葉。壓竹半封脩。侵  
野且漫積。入池忽自消。前林堪畫處。千樹列瓊瑤。

酬藤有禎父病中賦初雪和歌見示

海風吹雪到簷端。寒入曙廳夢半殘。臥病日高知未起。故  
人清節似衰安。

右の第二句、此間の病床別て甘心候條、則和其未字呈る。  
右心緒期來信候。

柴の戸のひまもる風のさむしろに幾あかつきの夢や残れる  
一、竹田忠張へきのふ返報。

野風にたぐひ、うち散りし雪の初花に心ひかれ、ひがこと  
のみかいつゞり侍りしを、見もし捨て給はず、古ことのを  
かしきさへとりそへて、御筆に物し給ふにぞ、瓦石もとば  
かり玉の光をそへ、蕪かゝる谷の埋木のちまで、たちそ  
ひ侍るならし。ことに賢き御ことの葉を、謝し申さでやは  
あらんとて。

しら雪の花とぞめづる言の葉にかよふ心の跡は見えけり  
一、櫻井知親の喪に

十六日。櫻井知親の喪に居つゝ、愁辭の述懐三首おくりし  
を見て、その返し三首。

あまり有る袖の泪にたどりこしいつ藤衣きつゝほすべき  
さして行く法の船にはともなはで残る恨にぬるゝ袖かな  
かつぬれて身を知る雨のふることも猶思はるゝ夕暮の空  
返し

せく袖のなみだに深きふち衣はづるゝ糸の色も知られて  
よそにきく袖だに痛く萎れけりなき人戀ふる言の葉の露  
彼岸にさし行舟もなき跡をとぶらふ法に眞帆やひくらん  
一、公館前庭の雪